

『エリスは豊太郎のことを本当に好きではなかった』

はじめに

舞姫を何度も読むうちにエリスの行動や発言に疑問を抱くようになり、本当にエリスは豊太郎が好きではなかったのではないかという疑問が頭の中に浮かんだため、このテーマにした。自分なりにこう思った理由が本文のどこかに必ずあるだろうと考えた。

概略について、この論を述べる上で根拠はすべて本文から考えた。まず豊太郎とエリスの出会いから交際に至るまでにおけるエリスに対する疑惑を示し、次に豊太郎免官時のエリスの思惑を、最後にエリス発狂に至った理由を明らかにする。本文をもとにするため、舞姫の本文の流れ通りに論を展開していく。

この論で私が言いたいことは、エリスは豊太郎のことを金銭的なもの抜きで考えたことは一度もなく、好きでなかったということだ。また、エリスは他の人間にもあてはまるどころがあり、人間には裏があるということ。

本編

豊太郎とエリスの出会いはクロステル港の古寺の前。ここでいう古寺とは教会と考えるのが一般的であり、教会の前の人通りが多い道であることが読み取れる。後の豊太郎の言葉「ここは往来なるに」とあるように、人通りがあった。そこで泣いているエリスに声をかけたのが豊太郎。

この出会いの場面でおかしな所がある。エリスは豊太郎と出会って数十秒、もしくは数分しか経っていないはずなのに豊太郎のことを「善人扱い」する。エリスから見れば豊太郎は外国人。この見ず知らずの外国人の男性に個人的な話をするものか。特に金銭問題について。そして「助けてください」と言うものなのか。一般的に考えればそんなことはないはずだ。

このことよりエリスは最初から誰かにお金をもらおうとしていたのではないかと考えられる。だから人通りのある道端で泣いていて誰かが話しかけてくるのを待っていたのではないか。容姿が最高にすばらしい少女にあなたしか頼りにならないのと泣きつかれてしまったら、多くの男性はその少女を助けてしまうものではないのかと、考えられる。エリスは自分の美しさを武器に豊太郎を誘惑したのだ。実際に豊太郎はエリスの震えるうなじに視線集中してしまっていると本文よりわかる。そしてエリスは豊太郎に自分は給料が少なく、私が食事をしなくとも返しますという同情を誘う言葉を述べ、エリスの豊太郎にむけた目は豊太郎の拒否権を奪った。

結局エリスは初対面の外国人男性豊太郎にお金、時計をもらう。有無を言わさぬエリスの瞳の奥には金という目的があったということがこれらのエリスの行動からわかる。

このときからのエリスの行動は信じられないものであった。エリスはお金のお礼に自ら豊太郎の下宿先へ行く。そこで一日中豊太郎の部屋にいたのだが、一日中いる必要性はある

のだろうか。若い少女が一度しか会ったことのない外国人男性の所へ自ら行くのか。お礼を述べてすぐに帰るのならエリスの行動を理解できるが、実際はそうではないことからエリスには何らかのたくらみがあったのだろうと予測できる。お礼を言うだけなら二人の関係はそこまでであるが、何とかしてエリスは豊太郎をとどめておきたかったのではないのか。エリスにとって豊太郎は初対面のときから時計をくれるという金持ちの人であり、そんな豊太郎を何とかして留めておきたかったのだろう。そうでなければエリスが豊太郎のところへ通う理由がない。そしてそのころ豊太郎とエリスの交際はスタートし、エリスは豊太郎という金ヅルを得られた。

舞姫本文に豊太郎がエリスの生い立ちについて書き綴っているところがあるということから、エリスは豊太郎に自分がどれほどつらい人生を送ってきたのかを話していたことがわかる。豊太郎とエリスの出会いのときも、エリスの家でも、エリスは同情を誘う言葉をいくらか述べている。また、その言葉に豊太郎は本当に哀れんでいる言葉もみられることから、エリスに確実にはまってしまっているとわかる。そして豊太郎の免官騒動や母の死の時までは清白であった二人の関係がもっと深い関係になってしまったのもこのときであったということが本文からわかる。簡潔に言うと豊太郎はエリスを愛する心が強くなって、エリスと肉体関係を持ってしまったのである。これでもうエリスから豊太郎は離れられなくなる。

豊太郎にとって免官、母の死、エリスとの関係を持ってしまったことは彼の人生においてとても大きなことだった。こんな中豊太郎がエリスに免官されたことを打ち明けると、青ざめてエリスの母には言わないで、と発言。なぜ母にばれるとまずいのか。本文より、豊太郎に学資がなくなればよそよそしくなるだろうからとある。このことから明らかにエリスの母は豊太郎の地位や金を目当てにしていたことがわかる。また、このことからエリスも金目当てであったことがわかる。その根拠はエリスが豊太郎と出会い、家につれて帰った場面にさかのぼる。最初はエリスの母は豊太郎を放っておいてエリスだけを家に入れた。そしてその数分後か数十秒後には先ほどとはまったく異なる態度の母がいた。おそらくこの数分の間にエリスが母に豊太郎から助けてもらう、つまりお金をもらおうと思うということを伝えて、母も納得したためにこのような態度の変化があらわれたのだと考えられる。そして今、豊太郎は免官されてしまった。すなわち母にばれると、豊太郎はもう用無しになってしまうのだ。

ここでひとつの疑問が浮かぶ。金目当てでエリスが豊太郎に近寄ったのなら、豊太郎が免官されたことがわかれば豊太郎は用無しとなり、すぐにエリスは豊太郎から離れていくことが予想される。しかし前にも述べたとおり、このころに二人は離れがたい関係となっていた。今後子どもができることが想定され、エリスも豊太郎から離れられなかった。なぜなら、もし離れたとしてももう妊娠しそうな身の上で他の新しい金ヅルを探すことは普通に考えて困難だと予想される。また、ここで豊太郎と離れてしまえば、エリスは今度こそ

エリスの母に売りに出されるだろうという予想がエリスの中ではあったのだ。その根拠は、エリスの言葉の中にある。まず豊太郎との出会いの時点でエリスは母をむごい人であると述べていて、また、エリスの部屋で「私を救ってください、お金は返します。それもできなければ母の言葉に(従うしかありません)」とある。ここでいう母の言葉に従うということは、おそらく体を売るということである。本文にもあるようにエリスのような舞姫の中には、生活が苦しくて体を売って稼ぐ人はまれにあると書いてあるが、少なからずいるのだ。エリスの父が生きていた間は、エリスは守られていたがもう父はいない。よって最後の手段としてエリスは母の言うとおりにしなければならなくなる。エリスはもちろん売りが嫌なわけで、これらのことよりエリスは自分のために母には免官を言うなといい、また免官された豊太郎からは離れるにはいかない状況であったのだと考えられる。ここで相沢の助けがあり、豊太郎は難を逃れる。また、エリスの妊娠が発覚した。やはり先ほど書いた通りエリスと豊太郎が離れがたい関係になっていたことがわかる。

エリス妊娠発覚からのエリスの言動はまさにエリスの本心をちらつかせるものが多々ある。まず豊太郎の地位について。エリスは妊娠のために気分がすぐれず、口数が少なかったある日曜日のこと。豊太郎のもとへ相沢から手紙が届く。これまで黙っていたエリスが「新聞社の報酬についての悪い知らせではないのか」とたずねる。しかしこの手紙が大臣のところへ来いという内容であるとわかったと同時に豊太郎の服選びに一生懸命になる。体調がすぐれなかったはずなのに。そしてここでエリスは豊太郎の地位が昇格するのを確信するように次の言葉を述べる。「たとえ富や地位を手になさる日が来ようとも私を見捨てなさないでしょう」と。この手紙で突然豊太郎への執着心が強くなったことがわかる。また豊太郎がロシアへ出張中にエリスから受け取った二通の手紙から、エリスの豊太郎への気持ちではなく、豊太郎が今後稼ぐだろう財産への気持ちが強くあらわれていることがわかる。その根拠は次の通りだ。

エリスは豊太郎が自分から離れていかないように数々のことを手紙に記す。まず、豊太郎の子を妊娠していることを強調。エリスのおなかの中には子がいるから離れないでと。また、エリスは豊太郎と結婚することや豊太郎と一緒に日本へ帰ることについて母をすでに説得したということを記す。エリスは豊太郎が自分から離れないように必死になっていることが読み取れる。

豊太郎がロシアから帰宅し、再びエリスは「あなたは正しい心を持っているから、生まれる子にまさか別の姓を名乗らせないでしょう」と発言。以前にも増して私から離れないで、赤ちゃんが生まれるから私を捨てないでという思いが強烈になっていることがわかる。これらはすべて愛があるからだと考えた人が大多数だと思われるが、その解釈には違和感を抱く。ここで先にも書いたようにエリスは豊太郎への執着心ではなく、豊太郎の今後の財産への執着心があらわれていると考えられる。なぜなら、ポイントは豊太郎の地位が高

くなりそうになったと同時にエリスは「私を捨てないで」と離れないでと強調しているからだ。豊太郎が相沢から手紙を受け取ったときから突然、エリスが豊太郎に捨てられないように、つまり豊太郎の今後稼ぐだろう財産に必死になっていることが本文から十分読み取れる。

しかし最終的にエリスは捨てられることに。そこでエリスは発狂。このエリスの発狂の理由は今後のエリス自身の人生に絶望したからではないかと考える。なぜなら、エリスは妊娠してまもなく舞姫という職を失っている。つまり収入源はすべて豊太郎にかかっている、その豊太郎がいなくなれば収入はゼロに。妊娠中のエリスと母二人では到底生きてはいけない。豊太郎に捨てられた時点でエリスは母の言うとおりにしなければならず、今後体売りをしなければ生きていくことはできない。そんな今後の人生に絶望したと考えられる。また、本文よりエリスは幼いころから父が貧しかったせいで、ずっと貧しい生活を強いられてきた。そんなエリスは少なからず、金のある生活を夢に描いていたはずである。その夢が今にも叶いそうで、目前にまで控えていた。しかしそれが一気に崩れてしまったために、その分ショックが大きかったのである。叶わぬ夢ならショックはそれほど感じなかっただろうが、もうすぐ叶うという夢が直前で台無しになることは相当大きなダメージになったにちがいない。期待をすればするほどそれが崩れてしまったときの悲愴感は莫大になるものである。

また、エリスにとってこのような絶望のふちに立たされたことは本文から読み解く限り、二回あると考えられる。一度目は父の死により今後の生活がエリスにとってつらいものになりそうであったときである。そのときは豊太郎が助け、エリスはどん底からはいあがてくることができた。しかし、今度は二度目であり、その絶望の原因となるものが一度目の絶望から救ってくれた豊太郎なのである。救ってくれた人に裏切られ、かつ絶望を二回味わってしまい、今後の人生がいやになったのだと考えられる。

ここで、一般的に考えると豊太郎がいなくなってしまい、豊太郎のことを好きで、愛していたから発狂したと大部分の人は考えるだろう。

しかしそれは違う。もしエリスに豊太郎への愛があったのなら、逆に発狂していないと考えられるからだ。その根拠は、エリスは豊太郎本人からではなく、相沢から豊太郎の話を聞いて発狂したという事実にある。エリスが豊太郎を好きなら、相沢から聞いたことをそのまま鵜呑みにするはずがなく、また鵜呑みにできるはずがない。好きなら豊太郎に確認するはずだ。

たとえば、もし恋人と別れるときに恋人の友人から別れ話を聞かされたとしても、別れの理由や恋人の心情を本人に聞かなければ納得できず、信じられるはずがない。好きならばよりいっそう本人と話をしたいと考え、また好きであれば多くの場合は引きとめようとするだろう。

しかしエリスはここで、ほぼ初対面である相沢からの話を聞いただけで豊太郎に真実を聞くことなしに、それを鵜呑みにして発狂に至った。つまり豊太郎への愛がなかったからだ

と考えられる。エリスは相沢から豊太郎の帰国を聞き、それは事実であるとすぐに信じて、今後の人生に絶望したために発狂したのだ。豊太郎の気持ちは豊太郎本人にしかわからない。愛していたなら、豊太郎の気持ちを豊太郎から聞くまで信じることはできない。

ここで私が考えるようにエリスは豊太郎のことではなく、金のことを考えていたなら相沢から帰国の話を聞くだけでそれが事実であると認識でき、今後の自分の人生が想像できてしまうのだ。

よってこれらの根拠より、エリスは豊太郎を好きで裏切られたから発狂してしまったのではなく、今後の自分の人生にひどく大きな絶望したために発狂してしまったと考えられる。

まとめ

本編より、エリスは豊太郎と出会った当初から豊太郎を金銭的なことで支えてもらうつもりであって、それはエリス自身が発狂する最後の最後まで貫き通されていた。エリスは最初から最後まで豊太郎を金銭的なこと抜きで、一人の男性として考え、愛していたのではなかったのである。すべてはお金のため、自分の人生のために動いていたのだ。また、このことはエリスだけに限られていることではない。多くの人間には裏があるものである。

しかしここで疑問点が残る。最後の場面でエリスは相沢から話を聞き発狂したのだが、相沢はドイツ語を話せたのかというところである。もし相沢が話せるなら、豊太郎のような翻訳家は天方には必要だったのか。また、もし相沢がかたことでしか話せなかったのであれば、エリスとの間に誤解が生じているかもしれない。そうするとエリスは発狂せずに、別の結末があったのかもしれないと思った。